

第1セッション

「大学放送公開講座と市町村との提携をめざして」

○総合司会

それでは、第8回放送利用の大学公開講座シンポジウムの第1セッションに入らせていただきます。

この第1セッションは、今回のシンポジウムのメインテーマでもあります「大学放送公開講座と市町村との提携をめざして」をテーマに、主管機関の北海道大学と北海道放送が企画したものでございます。北海道大学の放送講座の特色を紹介したビデオをごらんいただき、各パネリストの意見をもとに討議を行うものです。

第1セッション司会は、北海道大学放送教育委員会委員長、高田誠二教授でございます。

先生お願いいたします。

○司会（高田誠二・北海道大学放送教育委員会委員長）

高田でございます。

お勧めによりまして、第1セッションの司会者を務めさせていただきます。

ただいまから5時ごろまで、やや長い番組でございますけれども、どうぞご協力よろしくお願いいたします。

早速でございますが、パネルのメンバーをご紹介申し上げますので、お手元のプログラムに印刷されている順序でお名前を申し上げますので、ご起立お願いいたします。

松前先生、山林堂さん、松本さん、渡辺さん、浜野先生、高橋先生。

それでは、着席して司会をさせていただきます。

およそ3時間にわたりますので、スケジュールの要点をまずご紹介しておこうと思います。

最初に、私が、当然全体のイントロダクションをさせていただきますが、その後、2番目には放送教育開発センターの浜野先生にご登壇願いまして、この第1セッションに対するセンターのご期待のほどをお話し願いたいと思っております。

次に、先ほど総合司会からご紹介がありましたビデオを見ていただきます。これが正味は31分何秒とかでございますが、私が多少説明をいたしまして、35分ぐらいで進行したいと思っております。

次に、番号では5番になりますが、北海道大学の高橋先生が、この放送教育に関する調査研究の担当者でございますが、昨年度から新潟大学とも共同していただきまして、進めてきた調査研究のことを20分程度、中間報告をしていただこうと思っております。

次に6番目になりますが、山林堂さんは北海道留萌の教育委員会の方でいらっしゃいますが、留萌地区での放送講座への取り組みに大変ご努力をいただいている方でありまして、地区でのご努力のほどをご発言、ご発表いただきたいと思いますと思っております。

次、7番目と8番目は、北海道大学放送講座の視聴者、中でも優良なる視聴者二人をお招きしているわけでございますが、お二人から受講生としての本日の第1セッションに対する所見を述べていただくと、そういう手はずになっております。

それで、大体3時45分の目標ではありますが、そこで一旦質問応答などをいただきまして、時間の許すだけ休憩、10分程度休憩をしていただきます。

その後、順番としては11番で、遅くなって恐縮なのでありますが、松前先生から東海大学での放送講座、その他の教育活動のことを10分ほどご紹介していただくことになっております。

それで、計算いたしますと、残りが40分ぐらいなのでありますが、これは何ら番組をつくってごさいませんで、シンポジウムらしく皆様方、パネリスト相互間はもちろんであります、フロアにお集まりくださった皆様方も交えて討論を進めていただきまして、午後5時を目標で第1セッションを終わると、このようにさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、私の役目上のごあいさつであります、なるべく手短かに申し上げますが、本日のシンポジウム冒頭で、総合司会者も、加藤センター所長もおっしゃいましたが、今朝から御覧のとおり、この北海道は真っ白な豪雪に包まれております。そして昨日は、今年最も寒い日であったように思いますが、激烈な寒気に包まれております。そういう場所へよくお越しくださいました。厚く御礼申し上げます。

私どもから申しますと、大変勝手な解釈なのですが、この寒気と豪雪はシンポジウムを歓迎するために到来しているのであろうかと思うくらいであります。と申しますのは、この季節感を味わっていただくということが、私ども一つの念願でありましたのですが、見事に寒気と豪雪が到来して、季節感は十分味わっていただけると思う次第であります。

それで主題に結びつけて考えますと、そういう苛酷な風土、気候条件の中で、北海道の大学放送講座が進行している。冬季に行われるというのは、全国的な申し合わせでありますからいたし方ないのですが、北海道地区で冬季に放送講座を実行するには独特な苦心がございますので、この点などをお気にとめていただいて、ご議論をしていただければ幸いであると思っております。

次には、地域のことを申し上げたいのでありますが、本日お越しの方は、南は沖縄からもおいでになっていらっしゃるわけで、まさに日本列島を縦断して北海道まで来ていただきました。近いところでも東北、新潟でいらっしゃいますか、数時間を要してお越しいただいていると思っております。

そういう条件の中で、北海道の放送講座が展開されているということも一つの着目点として心にとめていただきたいと思っております。

最後に、北海道の広さでございますが、各地区から列島を横断して、北海道の札幌まではお越しくださったわけですが、この先がまだございます。北海道の東の端、根室の方までいらっしゃいますと、問題の北方領土が手に取るように見えます。

それから、北海道の北の端、稚内までいらっしゃいますと、天気がよければ、サハリンがありありと見られます。そこまでいらっしゃるには、車や列車ですと10時間オーダーの時間が必要であります。

先ほど加藤先生や学長が触れましたように、演習林も広いものを北大はたくさん持っておりますが、そういう広大な地域で、この放送講座が展開されているということ、これが本日のと申しますか、むしろ今年のシンポジウムの一つの大きなテーマに流れているわけでございます。

特に第1セッションでは、その広い地域の中で、各地区の市町村の方々のご協力をいただきながら大学放送講座が展開されている状況をまずご認識いただき、かつその中に含まれる問題を大いに活発に議論していただこうと、そういう趣旨でございますので、よろしくお願いたします。

それでは、パネリストメンバーからのご発言を逐次ご紹介申し上げます。

最初に、放送教育開発センターの浜野先生にご発言をいただきます。

浜野先生は、センターの助教授でいらっしゃいますけれども、お聞きするところによりますと、かつては映画監督もやっていたらっしゃって、黒沢組でもご活躍だったというご経歴の先生でいらっしゃいますが、今私が申しましたような主題については、北海道のことも大変お詳しくて、私どもの共同研究会にも何回かご同席いただいておりますが、同様に他の地区の放送講座のこともお詳しいので、さらに申しますと、諸外国の同様なことについてもお詳しい先生でいらっしゃいますので、第1セッションにかかわる主題について、各地区、他の地区、あるいは他の国の状況なども交えて、第1セッションに対するセンターからのご期待のほどをお話しいただきたいと思っております。

浜野先生、どうぞ。

○放送教育開発センター（浜野保樹研究開発部助教授）

ご紹介いただきました浜野でございます。よろしくお願いたします。

少し大げさな話しをしますと、教育といったものをずっと振り返りますと、考えられるあらゆるメディアを使ってきたわけですが、たまたま印刷媒体というものにぶつかりまして、学校教育の大衆化とか普及といったものができたわけです。

それで、要するに時代、時代に、非常に優勢なメディアを使って教育がなされてきたわけです。それが一般の人々に情報を獲得する手段として慣れているとか、安いということで、どうしても時代、時代に優勢なメディアに非常に大きな影響を受けて、教育というものは成り立ってきたのではないかと考えられるわけです。

たまたま昨日、私のところにアメリカ人が訪ねてきてまして話していたら、そういうことを考えていまして、非常に大きな衝撃を受けたのですが、日本の新しいメディアの調査をしているのですが、彼の話によりますと、アメリカのテキサス州の教育委員会では、小学校段階で今年度から教科書を使うことを放棄することに決めまして、ビデオディスクに転換するというところで、第1期に日本のあるメーカーが1万台を納入したということを知りました。

これまで教育といえば本と言われていたのが、本の一角が崩れてしまったわけですから、教育方法の歴史から考えますと、画期的な出来事で、本当にすごいことになったのだなという印象を受けたわけです。

ビデオディスクといいましても、文字が教育の主体ではなくなったという意味ではなくて、本というメディアの一角が崩れたということでございますので、そこは注意しなければいけないと思うのですが、やはり時代の影響を非常に教育といったものは受ける。そういったことで、我々センターでは、メディアといったものが非常に重要でございますので、いろんな研究を行いまして、例えば最近、通信衛星を使いました実験を行いましたら、昨日の読売新聞に非常に衝撃的な題名で紹介されまして、「学会発表はもう古い」という、何か僕は大学の先生方に怒

られそうな題名がついたかなり大きな紹介とか、朝日新聞にも紹介されたりしまして、そういう研究を行っているわけですが、実は教育といいますのは、その地域の事情とか、文化とか、伝統とかといった、深く根差したものと不可分でございますので、そういう新しい方法、もちろんこれまでの方法もあるのですが、そういう地道な継続されているご努力とのキャッチボールをしなければ、絵にかいたもちに終わるわけです。我々のセンターは研究所でございますので、なかなか地道な努力の場といったものを非常に持ちづらい状況に置かれておりますので、そういった意味で、放送公開講座といったものをセンターでは非常に重視しております。

ちょっと大きさに言いますと、例えば北海道の放送公開講座の、受講生の数は別にしまして、視聴者、受講生も含めた視聴者の数を考えますと、少なくとも北海道大学の純然たる学生よりも多いわけです。ここにいらっしゃる松前先生の大学を含めても、北海道全体の、北海道にあるすべての大学生の数を含めた数よりも、実は北海道大学がやっていらっしゃる公開講座の視聴者というのは、多分多いのではないかと、これは間違いではないと思うのです。それはどの放送公開講座でも同じですが、よく考えてみますと、こういったたぐいの番組は、ニュース番組とか、娯楽番組とは違まして、ただぼうっと漠然と見ているという番組ではありませんで、何らかの積極的な意志がない限りは、45分とか30分は見続けていないはずなのです。

少なくとも、そういった人が、正規の大学の学生の数よりも多い人々がそういうものに接してくれている、何らかの積極的な意図を持って接してくれている。それに対する社会的な責任とか、そういったものは非常に重いという気がするわけです。

そういったニーズとか、大学の責任に関しまして、北海道大学では、先ほど高田先生がおっしゃったように、非常に寒い時期で、非常に広域性もありまして、難しい状況にありながら、社会教育機関と連携をとりながら、非常に地道な手づくりの社会教育運動として、これまでずっと継続されて育て上げていったという、非常にすぐれた実践をされまして、センターでも非常にありがたいことだと思っているわけですが、なかなか広域だとか、寒いとかいっても、なかなか来てみないとよくわからなくて、私もこんな寒い時期に来たのは初めてで、これで朝早く放送公開講座の番組を見ている人は、それだけでえらいというふうに感動してしまうわけですが、そういった地道な努力の今日ご発表が聞けるということで非常に期待しておりますし、先ほど加藤所長がお話があったように、徐々にいろんな団体とか機会を提供されている教育が、正規の大学の単位として認めてもいいのではないかと、この動きが日本でも起こっています。これはやはりアメリカで先例がありますが、企業内教育であろうが、民間の公開講座であろうが、ある認定機関が審査しまして、大学、高等教育レベルの段階に達しておれば、それは大学の単位に認めるという制度がアメリカで、もう大分前から動いております。

これは完全に私の個人的な意見ですが、もしそういうシステムが日本で認められたとしたら、多分、一番至近距離にあるものの1つは、放送公開講座ではないかと思えますし、ただそういったときに、こういった広域の中で、いかに高等教育のレベルを維持しながら社会教育、広いニーズ、要するに北海道の全フォーマルな高等教育よりも多い人々にサービスを与えるかという、非常に重大な問題とか課題が残っていると思えます。

そういうことで、きょうは、これまで北海道大学が蓄積されてこられたノウハウとか、実践をお聞きすることを非常に期待しておりますし、勉強させていただきたいと思えます。

以上でございます。

○司会（高田）

ありがとうございました。

おほめとお励ましと両方、早速ご発言いただきまして、感激しております。

では、先ほど申し上げた進行順序で、次の段階に進みたいと思いますが、ここでビデオを御覧いただきます。

このビデオは北海道放送が大変な努力をしてくださりました。私とその前置の説明をしようかと思っておったのですが、それは事実上ゼロにいたしたいと思えます。

と申しますのは、放送局の方は余計な説明してもらいよりも、でき上がったものを見てくれというのが、本心でいらっしゃるだろうということに先ほど気がつきましたので、説明は省略いたします。

ただし、私の役目柄、一言だけ申し上げますと、この第1セッションのパネルメンバーとして、放送局関係の方もご登壇いただくという話が一時出ておったのでありますが、放送局の方は、その市町村との提携というテーマではなじみがないと、発言席には立ちにくいというお考えがありまして、結局こちら側の席には来ていただいておりません。そのかわりではないと思えますが、このビデオ制作にその情熱を注入していただいたものだと思っております。

先ほど私が申しました北海道の季節感、あるいは広さ、広域性、中央から離れている地域性、そのようなことだけを私どもから注文申し上げたのでありますが、十分に私どもとしては誇りを持って御覧いただけるものと思っております。31分何秒だそうでございます。どうぞお願いいたします。

— V T R —

○司会（高田）

ご視聴ありがとうございました。

このドキュメンタリービデオにつきましても、ご感想、ご批評があろうと思えますが、それは後ほどお願いいたします。

制作者もこの席に来ていらっしゃいますので、ご質問などがあれば、後ほど話題にしていただけるとよろしいと思っております。

補足はしないとさっき申したのですが、一つだけつけ加えたくなりました。今のビデオの中でナレーションを担当してくださった方、それでテレビ講座の聞き役をしてくださった方が、きょうの総合司会の船越さんでございます。お気づきと思えますが、もう一回ご紹介申し上げます。

それでは、議事を進めまして次に移ります。

次は、北海道大学の高橋先生にお話をいただきます。

高橋先生はもともと英語がご専門なのですが、先年来、口承文芸のご研究に携わっておられまして、昨年度のラジオ講座の主任講師として大変ご活躍になりました。私も同期でテレビのことをやっていたものですから大変仲よくなりまして、新潟大学の共同研究も高橋先生と、またさらに途中からは高倉先生にも加わっていただいで進めている間柄でございます。

高橋先生は、昨年度のラジオ講座以来、いろんなご経験をお積みになりました。これは共同

研究もあり、それから今画像でごらんになった委員会の中でのご活動もあります。そういうことを踏まえまして、これも画像にありました双方向のコミュニケーションのこと、あるいは意見交換会のこと、そんなことについて今年度の研究調査はまだ進行中でございますけれども、現在までの成果の要旨などをお話しいただきたいと思います。

高橋先生、どうぞ。

○北海道大学（高橋宣勝言語文化部助教授）

ご紹介ありました高橋です。

今のフィルムにもありましたように、北海道が非常に広いということ。そこに的を絞りながら、今日の大学講座と北海道の地域性をどのように考えているかというようなこととお話ししていきたいと思います。

今ご紹介にありましたように、僕は北大とそれから新潟大学との共同研究というのがありまして、その一員として去年から仕事をしております。新潟大学と北大の共同研究のテーマというのは、受講生サービスとそれから受講生の拡大というのが共通するテーマであります。そのうち、北大は、特に受講生拡大、それを主に考えているわけでありまして。なぜ受講生拡大かと申しますと、この場合の受講生拡大と申しますのは、北海道の場合は、主として札幌以外の地域の受講生拡大ということでありまして。

それはどうしてかと申しますと大体3点ございまして、第1点は何度もお話がありますように、北海道がいかにも広いということ。今のフィルムを見ておりましても、私も北海道生まれで北海道育ちですけれども、こんなに広いものかと改めて驚いているのですが、その広い地域に札幌以外に5地区、つまり函館、北見、留萌、旭川、帯広と、札幌を入れて6地区であります。その地区を拠点にして北海道全域をカバーしなければならないということです。ですから、札幌以外の人たちをいかにして受講生として呼ぶかということが大きな問題になるわけです。

第2点は、先ほどもフィルムにもありましたけれども、スクーリングがありまして、講師の方々が年度に2回、各地を訪れます。札幌はスクーリングが3回ありますけれども、それ以外は2回行くわけです。そのスクーリングに行かれた先生方は、帰ってくるなり、皆まず間違いなく感動して帰ってくるわけです。感激して帰ってくるわけです。いかにも熱心であると。本当に熱心なわけです、札幌地区以外の方々は。

例えば、これは僕も北見に行ったときに、そのスクーリングに来ている人が、北見からさらに数時間のところの網走から来ている、そんな人がおりました。

それから、これは留萌でしたでしょうか。留萌の方ではさらにずっと遠くの北のはずれの稚内、あそこあたりから受講している。そして、そのスクーリングにはるばる何時間もかけてやってくると、そういう人もおりまして、そういう人と話をしたりすると、みんな異口同音に、講師の方々感激して帰ってくるわけです。これは、とにかくそういう人が各地にいと、地方にいと、その人たちにどうにかしなければならぬというような何か非常に情熱がわいてきまして、そういうことも一つの地方の受講生拡大と、その理由の一つになっているわけでありまして。

一応、ここで地方というふうな言葉で、札幌以外のことを言わせていただきますけれども、

どうして札幌以外の地域の受講生の人たちは熱心であるのかと。札幌も熱心ではありますけれども、特にそういうふうに印象を受けるのかと申しますと、その地方には、札幌の場合はかなりいろんな講座があって、カルチャーセンターみたいなものがたくさんありまして、言ってみればその中からどれを選ぶかというぜいたくな悩みが逆にあるわけですが、ところが札幌以外の地域は、大きな都市は、函館とかそういうところは別でしょうが、先ほどの留萌なんていう都市は、そういった選択はない。つまり、こうした大学講座といったような感じの講座はないわけでありまして。ですから、それを受ける、それを受講する人たちの気持ちが、本当にそこに何か真摯なものがあるわけです。

そんなようなことで、きっとスクーリングのときにも、講師がそこに行くと、肌と肌が触れ合うような感じ、つまり本当に大学講座を受けているのだというような感激を向こうの人も持っているというような気持ちが、こちらにも伝わってくるわけです。でありますから、これは地方の受講生をとにかくふやしたいというのが、皆スクーリングに行かれた先生方の一致した気持ちであります。

それから第3点は、先ほどもちょっとグラフが出ましたけれども、受講生は、今年の生体工学の場合は、全体の受講生は600を超えて、久方ぶりにかなり高くなっているのですが、地方の受講生に絞って考えてみますと、どうもこの数年ずっと停滞、あるいは減少ぎみなわけなのです。

そんなことで、とにかく私たちは、最初にお話ししたように、北海道全域をカバーするということですので、どうして減少しているのか、どうして地方受講生が数が停滞しているのかということはやっぱり大きな問題で、それをどうにかしたいと、そういうような理由から、私たちは受講生拡大を、特に地方の受講生というところに焦点を絞って、いろいろと考えてきているわけです。

そこで、今年度私たちが行ったことをちょっとご紹介いたしますと、これもフィルムにありましたけれども、昨年8月に各地で窓口になっておられます教育委員会、その担当者の方、きょうも留萌の山林堂さんが見えていますけれども、その各地の教育委員会の方に来ていただきまして、そして放送委員会に来ていただいて、そして各地の状況、事情、問題点、そういうものを聞きながら、いろいろとお話をしたわけです。

このねらいはどこかと申しますと、いつもの例ですと、こちらの方から各地の教育委員会の方々へごあいさつして、よろしく申し上げますと、いつもそれで終わっていたのでありますが、どうもそれでも何か頼むだけ頼んで、とにかくまあまあというような感じのような気がしたものですので、それで一度実際に話そうと、その中から何かが見えてくるかもしれないと。そして、本当に各地の問題点や何かを実際に聞くことによって、私たちもまた新たな思いで問題に対処できるかもしれないと、そんなねらいがあったわけです。

それともう一つは、各地で頑張っておられる、窓口になっておられる教育委員会の方々と一緒に触れ合うことによって、委員会の中に来ていただいて話をするということによって、そちらの教育委員会の方々もまた新たな気持ちでこの講座に取り組むというようなこともあるわけで、どちらにとっても、講座を進める上で非常にメリットになるだろうと、そういうことを考えて、昨年8月に会合を、先ほどのフィルムにありました会合を持ちました。

そして、いろいろと話を聞いたのでありますが、やはり各地とも事情がそれぞれであります。私たちが一番驚いたというか、感激したのは、各地の方々がいかに宣伝をしているかということなのです。例えば、これは北見の例でありましたけれども、北見では小学校の児童にチラシをつくって、講座の宣伝のチラシをつくりまして、そして児童に全部配付して、うちに帰ってお父さん、お母さんに見せなさいとやっているといったり、それから留萌では先ほどもありましたけれども、いろんな広報を使ったりと、各地でいろんな努力をなされて、そういうことを私たち委員は聞いたわけでありまして。本当に、頭の下がるような努力をされているということを知って、一同ますます頑張らなければならないというような気持ちを持ったのであります。あとそのほか、先ほどもありましたが、テーマのことも、例えば各地でもいろいろなこういうテーマをやってほしい、ああいうテーマをやってほしいというような、そういう要望も出てくるというふうなことをお話して、これがこれから私たちが地方の受講生拡大をねらうときに1つのたたき台として、これから検討していかねばならないと、そういう幾つかの問題点が出てきました。

最初にお話ししましたように、共同研究とというのは、新潟大学と北大とで一緒にやっておりますが、今年は、北大では初めての試みとして、双方向という、双方向コミュニケーションであります。それを行いました。先ほどのフィルムにもありました。この双方向と、それから意見調査ということをごこれからちょっとお話ししてみたいと思います。

双方向というのは、もともと新潟大学がおやりになっていたことで、それでこの共同研究の話し合いの中で北大もということで、今年初めてやったものです。あのフィルムのとおり、はがきを受講生に送りまして、そうして何か感想などを書いてもらうというのですが、私たちは13回の講座ですので、それを3回に分けました。それで1回から4回、それから5回から8回、それから9回から13回と、その3つに分けて、3枚の回答用紙を送ったわけです。

そうして第1回から第4回の講義について、どんな感想を持ちましたかとか、それからご質問があればどうぞとか、とにかく何でもいいからというような言い方でお渡ししたわけでありまして。そして、そのはがきの下の方に委員会からのお答えとして、書かれてきたものに対してこちらが回答すると、そしてやり取りしていたわけでありまして。

これが送られてくる期日がばらばらでありましたので、統計としてははっきりしたデータはまだ完全にできていないのでありますが、ちょっとここで1月末日、先月の末までのデータをご紹介します。

今、スクリーンに出てくるはずですが、おわかりでしょうか。ちょっと見づらいかもしれませんが、双方向、回答数です。1月の末日現在なのですが、あのように一番上にラジオ、テレビがありますが、受講生は今年、ラジオは465名、それからテレビが627名でありました。その内訳を見ますと、札幌圏と小さく書いておりますけれども、そのラジオの場合は465名のうち317名が札幌圏であります。札幌外というのが、いわゆる今、地方というふうに呼んでいたのですが、それがラジオが148、テレビは215人おりました。

そこで、その3回に分けた双方向の回答であります。それを最初は初回答ですね、まず最初に何回目をよこしたかというのをとってみました。1回目をよこした人が42人、2回目を始めてよこした人が2人というようなことでずっといって、実質的に先月の末現在では合計47

人、ラジオが47人、それからテレビが52人送ってくれたことになります。回答を寄せてくれたことになります。

その内訳を見ますと、札幌圏がラジオの場合ですと、47人のうちの29人であります。そして札幌外が18人おりました。それでテレビの方は札幌圏が24人、それから札幌外が28人であったのです。

この数字を見て、はっきりしていることは、札幌圏よりも、札幌の他の人たちの方が非常に熱心に送ってきていると。特にテレビの場合には、札幌圏よりも札幌以外の方々が28名とかなり多いわけで、一番上の受講生数の内訳を見ましても、つまりテレビの場合、札幌圏の人は412人いたわけです。そのうちの24人だったわけです。それに対して、札幌以外の地域の人たちは215人の中の28人ということで、これは圧倒的に札幌以外の受講生の方々がいかに熱心かという1つのはっきりとしたデータ、今のところですね、それになろうかと思えます。

これは余談ですけれども、その下に男性、女性と別れておりますけれども、どうやらこの傾向を見ますと、ラジオの場合ですと、男性よりも女性が多い、送ってくれた人。それからテレビの場合は、男性の方が圧倒的に多いということなので、テレビは生体工学でありまして、どうしても科学の方はどうやら男性の方がより強い感心を持たれたのかもしれない。ラジオの方は「魔法の角笛」というドイツ文学でありました。女性の方が何となく多くよこしたというのは、何か傾向があるのかもしれませんが。

そういうわけで、これは最終的なデータではございませんけれども、ともかくも双方向の回答の数から見ますと、今見ましたように、地方の方がいかに熱心であるか、地方の方がというのはおかしいのですけれども、地方の方々がいかに熱心であるかということが、はっきりとわかるわけであります。それが双方向の今年初めて行った一つの私たちに対する受講生拡大に向けての1つの重要なポイントになりました。

もう1つ紹介するのは、意見調査ということではありますが、先ほどのこれもフィルムに実は出ていたのですが、私たちは去年からやっておりますが、スクーリングの最終回にスクーリングの講師と、それから各地の場合はその各地の教育委員会の人、そしてその受講生と三者が一緒になって意見交換会をするわけです。各地に行きましたら、その地区の教育委員会の方が司会に立ちまして、そしていろいろと意見交換会を行なうわけですが、ことしは幾つかの主題をつくって意見交換会をしたのです。詳しいことは討論のときに、必要ならばそのときにお話することにいたしまして、非常におもしろかったのは、この意見調査で、一つは講座内容を問うた意見調査がありました。それは去年の場合の意見調査のときには、去年の大阪大会のときに、今の司会をやられている高田先生が発表をなさったのですけれども、去年の意見調査をいたしましたらば、多くの方々が生涯教育としてこの講座をとらえている。そこで今後はどういう講座であってほしいかというようなことを意見調査でやってみたのです。そういたしますと、大半の人たちが教養的な講座にさせていただきたいと、実用的というよりは教養的な講座にさせていただきたい、これが札幌、各地問わず、ほとんど教養的ということが、圧倒的に強かったというのが1つであります。

もう1つ、これが非常に関心があるのですけれども、意見調査の最後に、私たちは、これまでの経験からこの講座を近所の人にちょっと言って誘いましたか、知り合いを誘ってみました

かというような、そういう他人を誘ったかというような、そういう問いかけをして、どの程度口コミでやられているかという調査をしたわけです。それを意見交換会で自由に話しながら問うてみたわけです。

そういたしますと、これが非常におもしろいのは、札幌のスクーリングにおいては、そういうふうな口コミでというか、知っている人、近所の人、職場の人、そういう人に「どう、受講しない」というような誘いをかけたことがないという人は少ないのです。札幌の場合は、もうほとんどの人が声をかけたというのであります。それに対して地方の方は、かけないという方がほとんどなのです。ある地区はもう100%かけたことがないというようなこと。つまりもう全然ほかにはしゃべっていないというような、そういう結果が出たのです。これは非常におもしろい、これをどう考えるべきかというようなのはこれから私たちの考えることなのでありますけれども、こんな結果を見ますと、ただいまのところは、僕は次のような感じを持っているのです。

つまり地方の人たちの受講生は、双方向の回答とか、それからスクーリングにおけるあの熱意、そういうものを考えますと、どうやら講師と受講生との間のこの1つの触れ合いというのか、スクーリングは講師が行くわけですから、そこで触れると。そうすると、受講生の方々は、本当に大学の先生が来ていただいて、本当に大学の授業がなんていうような声が聞こえるわけです。聞かれるわけです。双方向の場合も、そういう調子でどうやら書いてきているみたいだ。そして、先生からの答えをもらったという、その感激みたいなものがあるようです。

そんなことで、どうも双方向、スクーリングなどで非常に絆を強くして行って、そして同時に口コミで誘ったことがないというわけですから、これまでは。だから口コミで少し誘い合って、そういうことをすれば、各地の受講生も少しは増えるようになるかなというようなことを今思っております。それが、私たちの共同研究で行っている仕事のうちの大きな部分のことなのであります。双方向とスクーリングを中心にして、今までの私たちのやっていることをお話ししました。

あとサービスということもあるのですが、それは後ほど討論会のときに、その話をしようと思っております。

時間ですので、一応これで終わらせていただきます。

○司会（高田）

ありがとうございました。

討論のときのテーマも既に予告をしていただきました。それは後刻に回します。

では先に進めます。

次は、今度は各地区のお世話役の代表で、留萌市の山林堂さん、留萌市教育委員会の社会教育の主事さんでいらっしゃいます。ビデオにもありましたように、中規模の都市で、高等教育機関がない都市で、この放送講座に対して、どのように取り組んでいらっしゃるか。ビデオの中でも山林堂さんご自身が発言していらっしゃいましたが、それを敷衍してご発言いただきたいと思えます。どうぞ。

○留萌市教育委員会（山林堂博義社会教育主事）

ご紹介いただきました山林堂でございます。

ただいまご紹介いただきましたように、留萌と言いますと、先ほどの映像にも若干出てまいりましたけれども、今の高田先生のご紹介にありましたように、中規模都市というご紹介でしたけれども、本当の小さな3万2,000人ぐらいの町でございまして、しかも毎年600人ぐらい、このところ600人ぐらいずつ人口が減っているという過疎を抱えている地域でございまして。高等教育機関というのは、一切ないような地域でございまして、そのようなところで私どもが取り組まさせていただいている学習センターの運営について、そういったことを中心にご報告をさせていただきたいと思っております。

最初に、学習センターを開設、運営するに当たっての私ども教育委員会、社会教育行政でございまして、いわば公的社会教育としての考え方を申し上げたいと思っておりますが、これは端的に言いますと、我々先ほども言いました公的社会教育として地域課題の一つにこたえるのだという考え方で、そういう立場でこの事業に取り組んでいるということを申し上げたいと思っております。

高等教育機関のない地域、いわば市民及びその周辺地域住民が、知的刺激を求めたり、あるいは知的欲求を満たすことができるような放送講座、そういうものに社会教育行政として、我々が主体的にかかわることは、まさに地域課題の一つに対応するものではないかというふうに考えておりますし、また放送講座そのものは、受講生にとってみれば、個人学習ということですから、そういう地域住民の個人学習への支援、援助と申しますか、そういうことをどのように果たしていくのかということについても、実は公的社会教育に課せられた課題でありまして、こういう面でも何がしか、私たちの務めを果たさせていただいているのではないかなというふうに考えております。

具体的にどのような取り組みをしているかということについては、特に運営面についてですが、これについては、先ほども映像に出てまいりました各地の学習センターも同様だと思っております。同じだと思っておりますけれども、私たち学習センターでも、受講生の拡大、先ほど高橋先生がいろいろお話いただきましたけれども、受講生の拡大を計ることが、一つの大きな役割、そういう務めを果たさせていただいていると。

それから、放送講座と受講生のつなぎと申しますか、受講生にとっては学習意欲の持続、先ほど個人学習と申し上げましたし、個人学習、結局寂しさや、あるいはなかなか学習意欲が続かないというふうなこともありますし、そういった意味での学習意欲の持続や高揚も含めて、何とか受講生にとって勉強しやすいような学習環境を整えるというふうなことに努めているということでございます。

と申しましても、とりたてて特別なことをしているわけではないのですけれども、とにかく留萌地区の放送講座の受講生の皆さんのために、よかれと思うことについては何でもやっているということでございます。ですから、私たちはいろんなことを実は北大さんの方にお願ひしたりして、ときには大きな迷惑をかけたりしているのではないかなとは思ったりもするのですが、私たちがやりやすいような形で、これまでも学習センターを運営させていただいております。

例えば、留萌地区では直接、私たちが受講申し込みを受け付けていると。これは私どもが募集にも歩きますけれども、具体的な受講申し込みの申込先を、留萌については私どもが受け付

けていると。これは、最初から受講生の方たちと学習センターとの意見疎通といいますか、そういうことを最初からやりたいということも含めて、そういったことで、北大さんをお願いして、私どもで受け付けているということでございます。

それから、スクーリングの日程を留萌地区、ちょっとほかの大都会の学習センターと事情が違うから、我々の曜日のやりやすい時間帯でやらせてほしいというようなことでお願いしたりして変更させていただいたり、それからまた、先ほど双方向の学習のようなお話がございましたけれども、かつて私どもは、学習センターとして質問はがきというような往復はがきを用意しまして、受講生が直接放送講座の先生にご回答をいただけるような取り組みをしたこともありましたし、それからスクーリングの先生がお見えになったときには、受講生向けのスクーリングはもちろんおやりになっていただくわけですが、そのほかにも、これは受講生とそれから一般市民の方も含めまして、別口で先生のご迷惑も考えないで、別なご講演をまた1つ用意していただいたなんていうことも何度かございました。そんなことをさまざま取り組ませていただいてまして、かつては、これは1度だけで終わったかと思うのですが、地元での学習会のチューターがそれぞれ学習センターにいらっしゃるわけですが、このチューターの先生方が自分の役割どころをどう考えて、どのような学習会にすればいいのかということを実は我々学習センターともども悩んでおりまして、北大さんのお考えや他の学習センターとの情報を交換するために、北大さんをお願いして、全道のチューター会議を開催させていただいたということもございました。

これは、我々の方では、学習センターはこういうふうにしたい、ああいうふうにしたい、それは受講生にとって何とか、先ほども言いましたようにいい学習環境をつくり上げたいという思いで、そういうふうなことを北大さんの方にご無理をお願いしているようなこともたくさんあるということでございます。

それから、学習センター独自の取り組みなのですが、テレビ、ラジオ両方の受講生とチューターにお集まりいただいて、放送が始まる前に合同の開講式をやったりしております。それから、放送講座期間中に、事務局というか、我々学習センターの方で、北海道大学放送講座新聞なんていうものを発行しまして、例えばスクーリングとか、学習会とか、あるいは開講式とか、そういう節目、節目に、各受講生に配付したりしております。

それから、これはちょっといろいろ問題もあるところのようではありますが、離島、つまり留萌管内の島、それから留萌管内でも北部地区あたりではラジオの電波が届かないところがあるのです。しかし、やはりご熱心な受講生がいらっしやいまして、特にテレビの方は画面いいのですが、ラジオの方が、ラジオの難聴地区なのです。そういうところの受講生がいらっしやいまして、何とかしてほしいということもございまして、私どもとしては、これはもちろん北大さんやHBCさんの了解を得ながら、テープをダビングしてお送りしているというふうなことです。

それから、スクーリングや学習会にいつも来ていただいているわけではなくて、せっかくスクーリングに来ていただいている先生には申しわけないのですが、真冬になって吹おいたりしますと、なかなか受講生もスクーリングに参加できない状況が出たりしまして、大変先生方にはご迷惑をおかけすることが多いわけですが、しかし我々としては、何とか学習の進化

を図りたいということも含めて、スクーリングでお使いいただいた学習資料等をそういった参加できなかった学生さんにお送りしたりするというのを続けております。

それやこれやシーズン中、4カ月ぐらいにわたりますでしょうか、3カ月ですか、10月から1月ぐらいまでですから、そのぐらいの期間中に、私どもが学習センターとして個々の学生さんと連絡をとる回数というのは、10回は下らないのではないのかなということを考えたりしております。

私たちが、このようなことに取り組んでいるのは、学習センターとその受講生、我々学習センターと受講生、それからまた受講生同士の絆を結ぶということです。あるいはその絆を深めながら、その学習意欲の持続や、あるいは学習の進化が図られるということを願ってのことなわけですが、いずれにしましても、私たち留萌地区の放送講座受講生にとって、学習センターはどんな存在であってほしいのか、またあるいは何をしてほしいと思っているのかということ等を常に念頭に置いて、学習センターというのは運営されるべきなのだろうというふうを考えております。

次に、放送講座そのものに何を期待するかということなのですが、まず、とにかく私どもとしては、この講座がずっと続くこと、つまり継続されることを願っているということが第1でございます。

内容面について言いますと、先ほど高橋先生の方から今年の調査についてのご紹介がございましたけれども、確かに教養的なものが多いというのが多いようですし、しかしこの前は、私どもの地区の調査、来ていただいたときの調査では、実用的なものが多いというものも含んで、半々だったような気がします。ただし、これについては、個々の学習者の興味や関心は違いますし、受講する動機もそれぞれ違うわけですから、どちらがいいというふうなことは何とも言えないのではないかと思います。それから、学習のジャンルといいますか、あるいはテーマについても、同様のことが言えるのではないかなというふうな気がしております。

ただ、私たちにとってやっぱり大事なものは、こういった知的欲求を満たすことができるような、あるいは先見性豊かな、言ってみれば、真実を求め続けている大学レベルの講座、こういうことが、このような放送媒体を通して、言ってみれば、一般市民にも開かれるというふうな、こういったことが常に用意されていると、そのことがやっぱり一番大事なのではないかなというふう考えております。

受講生にとっては、自己を見つめること、あるいは社会や地域を見つめ直す契機となる、あるいは具体的な行動に結びつけることができるような、こういった学習機会に浴することができる、そういう状況にある、そういう環境にあるということが、何をおいても大事なのではないかなというふうに私は考えております。

大分時間がたったようですけれども、先ほど、まだまだ私たちの方、本当は学習センターに対しての課題はたくさんあるわけですが、時間がございませんので、先ほど高橋先生もおっしゃっていましたように、私どもはスクーリングなんか開かせていただきますと、稚内、それからそのちょっと南隣の豊富、それから天塩、車にして4、5時間もかかるようなところから、真冬わざわざおいでいただくわけです。それで終わった後、晩の9時ぐらいに終わるわけですが、また帰っていかれるわけです。2時間ぐらいのスクーリングのために、往復7、

8時間かけていらっしゃるという方が、確かにいらっしゃるのですね。そういう方たちのことを私らいつもそういう方たちと接触させていただいて、本当に頭が下がる思いがするわけです。

ですから、我々の地区、確かに受講生数はもちろん少いですし、絶対数が少ないわけですから、なかなか大変なのですが、そういう方たちの姿を見ていますと、何とかこういった学習センターの仕事を通して、そういった本当に勉強したい方たちのために、何とかいい学習センターの運営をしていきたいと思っております。

以上で、大変舌足らずで申しわけございませんでしたけれども、ご報告を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

○司会（高田）

ありがとうございました。

放送の電波は、空間を飛んで行くわけでありましてけれども、放送講座の展開は地上戦ですね、地上の仕事としては、今のお話のような方が最前線であるという認識を私ども持つわけです。最前線のご苦勞のほどがにじみ出ているお話であったと思います。

それでは、次へ進ませていただきます。

今度は、お二人の視聴者の方々をご紹介します。

最初に、松本禄郎さんでいらっしゃいますけれども、函館地区の優良視聴者ということなのですが、長く教員を務められたそうでありましてけれども、現在は上磯町という町の教育委員をお務めになっていらっしゃいます。

先日、電話でご連絡を申し上げたときのお話では、この北海道大学放送講座は、ラジオの方は4回、テレビの方は3回、ずっとお勉強なさっていると、そういうご経験、ご経歴でいらっしゃいます。

それで、今までの話題に関連しまして、大学放送講座のことをどういうルートでお知りになったか、あるいは実行されたご感想、特に今年の分などについてのご感想を伺いたいと思います。

松本さん、どうぞお願いいたします。

○受講者（松本禄郎・函館地区受講生）

松本でございます。

今、ご紹介いただきましたけれども、私とこの放送講座の出会いというのは、昭和62年なのです。教員をやっております、退職して2年たったときに、ちょうど公民館に勤務していたことがあるのです。あるとき、カウンターの上を見ましたら、北海道大学放送講座案内、そういうのが乗っていたのです。初めて目についたのです。それまではどこでどういうふうにするか案内が行っていたかわからないのですが、見ましたら、「中国の古典を読む」と、そういうラジオ講座が目に入ったのです。いろんな本を読んで、興味を持っていたものですから、これはおもしろそうだから、ひとつ受講してみようかと、そんな気持ちで、大変軽い気持ちで受講し始めたのです。

テレビはと見ましたら、「文化としての北」というテーマで、北海道の地方性を問うと、そういう何とはなしに、こちらはとっつきにくいテーマでございました。先ほどのスライドで資料を見ましたら、だんだん受講生が少なくなっておりましたですね。去年は「創造性—文化を

築き、科学を進める力」と、そういうサブタイトルがついておりまして、これが一番少かったですね。

私も毎年受講していて、そのあたりがだんだん何か難しくなってきたな、とっつきにくくなってきたなという感じがしていたのです。そうしましたら、今年は「生体工学」で、ずっと元に戻ったと。600何人かの受講生がいるということを知って、さもありなんと思ったのです。

この講座の出会いというのは、そんなところでございまして、知ったのがそういうことで、毎年のようにそれからその受講案内が公民館には届いておりました。と同時に、私どもの方は毎年やっているものですから、心をとめていただいているのでしょうか、北大からも直接、受講案内を送っていただいております。

受講の感想なのでございますけれども、非常に楽しいのです。ただ、ラジオの場合だと、とっつきにくかったのは、お話ばかりというのが多い。本当に講義というような形が多いのですね。学校あたりだと、小学校でも中学校でもそうですけれども、学校放送を利用しますというと、非常に子供たちの興味をひくような、そういう組み立て方をいたします。話だけではなくて、音楽を入れたり、あるいは擬音を入れたりということ。ところが、ことしのラジオの方は、それが入ってきたのです。ドイツ文学の「魔法の角笛」に。それで、非常に今年の文学は、ラジオ講座の方は楽しく聞いたのですよ。大分工夫してくださっているなという感じがいたしました。

テレビの方も、テレビの特性というのは目で見、動く映像を見られるということで、それが特性の1つだろうと思うのですけれども、大学の先生がいろんなものを使って、その場でいろんなお話をしてくださる、説明してくださるだけではなくて、先ほども千葉県だったでしょうか、どこかの研究機関の方へ出かけて、そして取材をして、それをテレビで流してくださっている。そういう工夫が今年は入ってきたということで、こちらの方も非常によかったなと、そう思いました。

ただ、先ほど開会されましたから、もう既に45分から30分の番組になっているところもあるという、そういう試みをしている放送講座もあると、そうお聞きしましたけれども、45分は長くないけれどと思いました。

ただ、考えてみますと、ラジオの方などでは、割とこの講座のPRの時間というのが随分あったような気もするのですよ。したがって、これはなかなか難しいことだと思います。プロの方が45分なら45分できちんと放送を終了するというのであれば、それはもうプロだから当然だろうと、そう思うのですけれども、先生方だと、なかなかそういうふうにはいかない。私も教員をやって知っていますけれども、45分の授業をやって、45分できちんと終わったためしがないのですから、当然その辺はわかるわけですけれども、そうしますと、それから考えてみますというと、45分を30分にするというのは、どんなふうなものかというふうな印象も持っておりました。

時間がまいりましたので、また。

○司会（高田）

ありがとうございました。

では、引き続き同じお立場で、渡辺恵子さんにお話をいただきます。

渡辺さんは、先だっでご連絡申し上げましたら、テレビもラジオも大変熱心にご視聴をいただいているのですが、そのほかに北大で開かれる大学の公開講座などにもおいでいただいているそうであります。

それから、新聞社のカルチャーセンターなどもたくさんおつき合いがあって、要するに学習好きのレディーでいらっしゃるということでご紹介申し上げます。

どうぞ、松本さんと同じようなご趣旨でご発言をお願いいたします。

○受講者（渡辺恵子・札幌地区受講生）

ご紹介いただきました渡辺でございます。

今、高田先生からお話しございましたので、その順序に従って発言していきたいと思います。

これまで、この放送講座、振り返ってみたら、結構受講しているのだなということが今回わかったのですけれども、「北海道文学の系譜」だとか、「近代ロシアの歴史と文学」「中国の古典を読む」、今までここ4、5年の間ずっと受講していたわけです。

いつもこういうのをどこで知ったかといいますと、私の場合は、ちょっと公的な仕事もありまして、よく市役所だとか区民センターだとかへ行きますので、私の場合は不思議と札幌の市役所の本庁の1階ロビーのパンフレットコーナーでふと手にして、受講しようという経過が今まで多うございました。受講を重ねてますうちに、大学の方からの連絡も参るようになりました。それから直接的には、北海道大学の先生が、直接この放送講座をするのですよというような情報をいただきまして、それで、そういうことならという、そんな感じで今まで何となく受講を続けてきたという経過です。

毎回思うのですけれども、自分には余り興味のない講座というのものもあるわけですが、今回、前回などで、私はどうも考えると文学系の方に興味が強いわけなのですけれども、「文化を築き、科学を進める力」などという、今まで自分では特別選んでいなかったものについても、ああ受講してみようかな、今回の「生体工学」に関してもそう思うようになりました第1の理由は、スクーリングが非常におもしろいということです。私自身の中では、ほかのカルチャー講座とか、そういうものにはない非常におもしろさと魅力を感じております。

それで、まずスクーリングを受講できる資格を得たいがために、まず登録をとというような状況になってきております。自分の全く、関心を持ってばいいのになと思いつつ、関心を持っていないものについては、放送を聞きながら、またスクーリングのときに、実際にテレビにあらわれた先生のお話を直接肌で聞くという、その魅力というものは、こういう情報メディアが発達すればするほど、非常な魅力を持つものでないかということで、特に札幌の場合は3回もあるという、うれしいメリットがありますので、その点では大変幸せな受講生であると思っております。

その場合も、私の場合は主婦ですから、これを聞こうと思っても、そのとき来客とか長電話で、切るに切れないで、ようやく電話が終わったら、そのラジオの放送も修了していたというようなこともままあることございまして、そういうのをカバーする第1番のいい場所がスクーリングの受講です。

年々やはり非常に工夫されて、内容もいろいろと広範になってきていて、それだけ私どもがいろんな面で視野を広めていくには好都合の学習の場という印象が非常に強うございます。ど

れ1つをとっても、そういう魅力にあふれているというところが、私が何をおいても、そこへ駆け出していきたい気持ちにさせられているところだと思っております。

以上です。

○司会（高田）

ありがとうございました。

渡辺さんは札幌の西区にお住まいなのですが、公的なお仕事とおっしゃいましたのは、札幌市民生児童委員を務めていらっしゃる、その関係のことでございます。

渡辺さんの今のご発言は、北海道最大の都市、人口集中傾向が著しい札幌市の受講生のお立場を率直にお話しいただいたものと思っております。

これでパネルメンバーのご発言を終わるのですが、やはり多少時間を過度に経過いたしました。それで、ここで質問ということにしておりましたが、それは省略いたしまして、休憩は10分よろしいと思うのですが、その後、松前先生のお話を伺って、残り時間を討論に当てるということにいたしたいと思えます。

では、休憩にいたします。

○総合司会

今高田先生からもご案内ございましたけれども、ここで10分間の休憩に入ります。

再開は4時15分ということになりますでしょうか。2階のロビーの方にコーヒーが用意してございますので、どうぞおくつろぎくださいませ。

休 憩

○総合司会

高田先生お願いいたします。

○司会（高田）

お疲れと思いますが、後半に入らせていただきます。

ご案内いたしましたように、後半最初に松前先生のお話を伺います。

松前先生は北海道東海大学の学長で、大変お忙しい、しかも入学試験時期でお忙しい中をお越しいただきました。

東海大学が放送教育に熱心でいらっしゃることは、皆様よくご存じであると思えます。昨年の報道によりますと、松前先生は、フランスのストラスブルク大学から学位をお受けになりました。学位論文の題目が「日本のFM放送が果たした文化的機能の歴史的研究」という題目だそうです。そういう研究の方のご経歴もお持ちであり、かつ大学行政の面でもご活躍なさっていらっしゃいます。

さまざまなご経歴の中で、地域教育のために放送をいかに活用していらっしゃるか、その辺を主眼としてお話しいただきます。どうぞ。

○北海道東海大学（松前紀男学長）

ただいまご紹介いただきました松前でございます。

私が、こういうところでお話するのは場違いかもしれませんが、私も放送教育開発センターの評議員なども務めさせていただいているものですから多少関係があるということと、それから長い間、東海大学が放送を通じての教育ということにかなり情熱を傾けてきたもので

すから、そういうことで、きょうはまず前半を具体的な例をちょっと示させていただいて、それから後半は、ではなぜこういうことを我々がやってきたかという考え方とか哲学みたいなものをちょっとお話しさせていただければと思います。

幾つもお話しすべきことがあるのですが、その中で、我々の大学がやっていることの2、3を、まず具体例としてご紹介します。

まず最初は、高等学校の教育をかなり前からFM放送を使って、我々の大学でやっております。

その高等学校の教育ですが、望星高校といいまして、これは現在は単位制高校になっておりますが、正規の高等学校としてずっとスタートしております。今まで多くの卒業生を出し、また大学にも入学させ、社会でも活躍している連中がたくさんおります。

一番最初にこの学校が始まったのが、昭和34年ですから、相当前のことで、初めわずか40人で始めました。いち時期、ちょっとブームになりまして、受講生がぐんとふえたのですが、やはり石油危機等の影響もございまして、急激に減ってまいりまして、どうなることかと思っておりますら、また最近かなりの数がふえております。

このグラフですけれども、生徒総数というところだけ見ていただいて結構なのですが、ちなみにほかのところをご説明しますと、集団生というのは、これは工場等と契約をして教育をした生徒のことです。それから、次の本科生、これは正規の形で入った学生です。それから、最近出てきましたのは、技能連携生といいますか、つまり専修学校とか、各種学校と連携を保ちながら教育をしている、そういう生徒たちも最近入ってきております。現在は、平成2年では3,430人という数になっております。

北海道では、本年度から、第四高等学校というのがございますけれども、この東海大学の附属です、そこを舞台にして細々と始めました。現在は、非常に少ないのですが、31人程度が第1年目に入っておりますが、15歳から50歳までの生徒が学んでおります。

現在は、東京、静岡、それから熊本、それに今度できた北海道と、この4ヵ所で教育をしております。

こういうふうな教育を長い間やっている中で、ではなぜこういう教育が続いてきたかという、一口に申し上げますと、先ほど渡辺さんですか、言われたことですが、やはりスクリーングを非常に大切にしてきたということですが、スクリーングでの教師と生徒との交わり、これがやはりこの放送教育を支えてきた非常に大きな絆になったということは、これは否めない事実です。そこでの教師側の熱意とか、それから情熱、こういうものが生徒たちを動かし、また生徒たちの熱意がまた教師を動かすという、こういう影響力というものが、この放送教育を支えたということが言えると思います。

そのほかに、我々の大学としては、いろんなことをやっておりますが、放送を使っての教育といいますか、放送を利用した教育活動として、次にご紹介したいのは地域活動です。これは昨年の暮れにやったもので、私がちょっと出ておりますが、教育活動ですけれども、夕張市と連携しまして、夕張市にバイオ試験農場というのをつくってもらいまして、そのかわりに我々がひとつ協力しなければということで、市の周辺の農村の人たちを集めて、定期的に塾を開いております。ちょうど雪の深いとき、農村ではちょっと暇のあるようなときを選んで、市役

所と協力して塾を開いております。そこで、これは昨年の暮れにやったことですが、ビデオ学習センターにご紹介いただいたビデオテープを使いまして、それを見ながら地域の活性化についての意見交換、また討論を我々の大学の学生も交えてやりました。こういう活動のほかに、地域のいわゆる活性化に何らかの形で大学が協力できないだろうかということで、地域の活性化につながる人づくり、こういうものに大学が協力するシステムを、実は入試の段階で取り入れております。これは地域推薦入試という形で、非常に特別な入試を一般入試のほかに行っております。

これは地域の公的な組織が推薦する高校生を、無条件でこちらは入学させて、これは1人か2人ですが、入学させて教育をして、そして卒業後はその地域に帰して在外研究員という形で大学はその卒業生に情報を送り続けると。そして、その地域の活性化に役立つ活動を大学が支援すると、こういうシステムを実行に移しております。

こういうふうなことから、大学の活動として、ただ単に学生を集めて教育をして、私学ですから、我々のところは。月謝を取って、それで教職員の給与を賄って、なんていうような、そういう容易なやり方ではだめで、やはりそれ以外のことをやることによって、社会に貢献しなければということで努力をしております。

北海道ではなくて、湘南校舎では、現在NTTと組んでNTTの職員の大学教育というものもやっております。これは放送大学と協力した形で今進めております。これはかなりの成果が上がっておりまして、このNTTの職員、これは全員ではございませんが、選ばれた職員を学部に入學させて、そして放送大学の放送を聞きながら単位を取らせ、また実験等は我々の大学で単位を取らせて、我々の大学の卒業生として送り出すということをやっております。これは始まったばかりですが、放送大学で単位を取るために、いろんな試験をこの学生たちが受けておりますけれども、聞くところによると、かなりいい成績を取って、熱心に授業を受けているという結果が出ているというふうに聞いております。

こういう活動ですが、なぜ我々がこういう活動をやるかということの以外に、なぜこういう活動が支えられているのかということは、これは我々が持っている一つの理念がございまして、そういうものに沿って、こういう活動が支えられているということ、ちょっとご紹介してみたいと思います。

我々の大学は、ただ単に、だれかが始めたくて始めたのではございませんで、実はデンマークの教育者であり、また宗教家であるニコライ・グルントビーという人の教育理想に創設者が共鳴して大学が始まりました。ニコライ・グルントビーというのは、やはり教育によって、国づくりの基礎を築くということを徹底的に国民高等学校という組織を全国につくることによって実現させた人です。特に、教育の機会に恵まれない農村の人たちに教育を与えて、高い見識を持った一般国民を育てるということによって、2度の敗戦をこうむったデンマークを再興するといいますか、そういうことを実行した人です。

この方の考え方というものを我々の大学は実は基礎としておりまして、我々もやはりそういうことをやろうということでやっているわけです。したがって、今までの望星高校のその活動も実はこの一環でございまして、戦後の疲弊した社会を救うためには、やはり教育が必要だということから始めた地道な活動です。

このデンマークにおける活動については、何も我々だけが気がついているのではなくて、これはアーノルド・トインビーの書物の中にも書いてございまして、トインビーが言っております。未来の豊かな社会では、必ずいつでも教育を受けられる、だれでも教育を受けられる機会が与えられるであろうと。既にデンマークでは、農業の改革を実行する国民だけあって、自分の収入の一部を割いてこの教育に当てていると。デンマークの農民というのは、6カ月か3カ月のコースを履修するために、何年もお金をためて、自分の経済的な地位を向上させるのではなくて、自分の教養を高めるために履修することを名誉としているということを言っております。これは言うまでもございまして、いわゆる学習社会といえますか、最近よく言われている生涯学習につながるのだと私は思っております。

この本が出されたのが、1963年ですから、その10年後、1973年にユネスコが未来の学習という報告書を出して、学習社会というものを提言しております。つまり生涯学習とか、オープンラーニングだとか、自己主導型学習というふうなことを言われたのはこのころだと思っております。

この実は国民高等学校、デンマークで行われている国民高等学校というのは、これは絵がございすけれども、見てみると、これは授業風景を描いた油絵なのですけれども、子供からおじいさんまで全員がこの授業に参加をして、一緒に話を聞くと。すなわち、まさにこれは生涯学習の縮刷版と言ってもいいかもしれません。既に、同じ問題についてすべての人が、やはりこうやって話を聞いて学び合うという姿勢、これがやはりデンマークの今日をつくり出した、非常に重要な意味のある教育だということは、多くの人が言っております。

例えば、この古い本を持ち出しましたけれども、『デンマークの農業』という本があります。これは興農学園という判が押してありますが、このことを言い出すときりがございませぬので、きょうはやめますが、その判に1929年と書いてありますが、この古い本の中に書いてあること、これちょっとその場面を出しますが、それを見ていただくとわかりますけれども、宇都宮仙太郎さんという、北海道では有名な方ですが、「余は何故に丁抹の農業を推奨せしや」というふうな文章がございす。それを見てもみますと、デンマークの農業というのは、ただ単に農業が優れているのではないと。むしろ農業だけではなくて、農業の進歩とともに、農民の文化程度の高さというもの、これがあって初めて優れた農業が支えられているのだということを言っております。

この中でも述べておりますが、宇都宮仙太郎氏が言っていることは、ウィスコンシン大学で、ヘンリー総長の講演を聞いたと。デンマークの農業とウィスコンシンの農業を比較してみると、デンマークの面積はウィスコンシンの4分の1でしかないと。しかも、デンマークは不毛の土地といっておかしいですけれども、肥沃でない土地であり、また天然資源にも恵まれていないのに、生産力はウィスコンシンを上回っているのはなぜだろうというようなことを問いかけております。したがって、一般大衆のレベルといえますか、教養、修養のレベルの高さというものが非常に重要だということを、もう昔から説かれているのでございす。

では結論として、我々が、私学ですけれども、一私学でございすけれども、細々と今一生懸命やっていることは、やはり生涯学習につながる、例えば放送メディアを使つての教育というものは、便利だからという、そういうことではなくて、個人の問題だけではないと、やはり

一般大衆の知識だとか、思想だとか、また技術的なレベルの高さというものを支える、重要な礎になるし、すなわち、こういうものに裏打ちされた国民全般のモラルの高さというものがやはり国力とか、国を支える重要な意味があるのだということを、我々は常に信じております。

そういうことから、個人においては、人生の尊さだとか、また生きがいを与える教育にもなるし、また質の高い、堅固な社会を形成する非常に重要な試みであると、これがやはり時代の変化だとか、歴史の激変だとか、または国際化、こういうものに耐え得る社会を構成するのだという、そういう信念で行われている教育でございます。

そういうことで、我々がやっていることというのは、非常にささやかですけれども、ふだんは非常に辛いこともあるし、何のためにやるのだろうというふうに何度も思ったこともございますけれども、しかし、やはり教育機関としてやらなければならないということで続けさせていただいているわけです。

簡単ですが、これぐらいにして終わります。

○司会（高田）

ありがとうございました。

具体的な事例を交えて、大変感動的なお話であったと思います。

これで、パネリストのご発言を終わるわけでありまして。残り時間を計算いたしますと、30分不足になってしまいました。たくさんのご発言をいただきたいと思っておりますが、そうもまいませんので、何人かの方からご発言をいただいて、できるだけ活発な討論をあとの残り時間で進めていただきたいと思っております。

と申しましても、いきなりご指名、あるいは挙手をお願いしても、ご発言が出にくいかと思っておりますので、放送教育開発センターのサイドからご批評などをいただくのがまず皮切りによるしいかと思っておりますので、いきなりで恐縮ですが、若松先生一言お願いいたします。

○放送教育開発センター（若松茂研究開発部教授）

放送教育開発センターの若松でございます。

ただいまの松前先生のお話もそうでありまして、休憩の前の各パネリストの先生方のお話を伺っておりますが大変興味深かったわけでありまして、同時に非常に感動いたしました。今回のシンポジウムは今日、これが第1セッションで、これから続くわけでありましてけれども、この第8回のシンポジウムのテーマであります「大学放送公開講座と市町村との提携をめざして」というテーマが、今日のこの第1セッションにすべてあらわれておりまして、これが私個人的には、正解というものは、もう既に出てしまったというような印象を受けます。

特に、北大の学習センターに対する取り組み方につきましては、数年来、私も何度かお伺いして興味を持っておりましたけれども、今日改めてまたお伺いしまして、非常に熱心に各地方の社会教育の方々が協力していらっしゃる、これは本当に頭が下がるといいますか、今日伺って何も言うことはありません。

あえて言えば、こういう北海道大学放送公開講座を取り巻く学習センター群を、社会教育にネットワークをおつくりになった北海道大学に対して、大変敬意を表したいと思うわけでありまして。いろいろいきさつがあったことは伺っておりますけれども、最終的には、各地域の社会教育が、自主的に取り組む形での大学放送公開講座のスクーリングの運営ということにすべて

が尽きるのではないかとされます。

どうもありがとうございました。

○司会（高田）

ありがとうございました。

突然ご指名申し上げましたのですが、おほめいただきまして恐縮でございます。おほめをいただいたのですが、私はまだ日が浅いのでございまして、先輩がやったことを継承しているだけであります。

それで、身内で恐縮ではありますが、放送講座の方の先輩の北村教授がお見えになっておりますので、3分ぐらいでお願いしたいのですが、ここに至る経過をご紹介ください。

○北海道大学（北村正直工学部教授）

北村でございます。

3分ですので、いろんなことを省略させていただきます。

私、放送教育そのものに少し関心がございましたので、最初から北海道大学放送公開講座に参加させていただきました。

先ほどのHBCさんのビデオにございました、お気づきなされた方がいらっしゃるかと思いますが、テロップのところに北海道と書いてあり、下に大学放送講座と書いてございました。私どもは、まず放送教育というのは何かといいますと、今まで気の機会が与えられなかった人に、教育を運ぶのだというふうを考えました。できれば、学習センターというのが、住んでいるところから1時間以内に行けるようなところまでたくさんあってほしいと思いました。しかし、そういうことができないので、札幌のほかに4つの都市を選ばせていただきました。

1つは、単科大学のある町、もう1つは工業高専のある町、1つは教育大学の分校のある町、そして最も期待して選びましたのが、何もない留萌でございました。そして、それらのところは、大学と教育委員会の両方に連絡いたしました。一番熱心に答えてくださったのが留萌だったと思います。大学と教育委員会となりますと、どちらが主になるか、それがあいまいだったからではないかと思えます。

そして、この結果がこのように非常にうまくいっていることは本当にうれしく思います。できれば、若松先生の前に発言すればよかったのですが、今こういうのはちょっとおもはゆい感じがいたしておりますが、これは私どもの後を引き継ぎました現委員会の方々を含めて、努力をなさってきた結果であろうかと思っております。

参考になればと思います。ありがとうございました。

○司会（高田）

時間を大変制限いたしました。過去の経緯、おわかりいただいたと思います。

さらに、ご指名をさせていただきたいのでありますが、この市町村との提携ということの眼目は、要するに受講生を拡大するというところでございます。そのテーマに沿って、開発センターの方の研究を担当している地区は、北海道のほかに金沢、新潟とたしか2つ、合計3つであろうかと思えます。金沢地区は明日ご発表がございまして、新潟地区は今年別なことでご発表になりますので、きょうの第1セッションで新潟の先生にもぜひご発言をいただきたいと思えますが、その前に一つおわびを申し上げます。

先ほどのビデオの中で、新潟の先生方と共同の研究会議を開いている場面を映像として御覧いただいたわけですが、私も見ながらちょっと心配しておったのですが、今年の新潟地区の受講生の数が余り多くないというような発言がありましてお耳障りであったかと思います。あれは、函館で9月に開いた会議の段階の話でございまして、その後、新潟地区はもちろんご努力なさいまして、結果としては大変視聴率の高い成果を得られているということも伺っております。

新潟大学の石田先生から、それ以後の経過も含めまして、また双方向調査の件では先輩でいらっしゃると思いますので、新潟大学の石田先生からご発言いただきたいと思います。

○新潟大学（石田幸平教養部教授）

どうもありがとうございます。

私ども高田先生と高橋先生、非常に情熱的な先生方と共同研究をさせていただいて、いつも啓発されております。

ただ、今ご紹介いただきましたように、私どもは双方向の教育という、コミュニケーションということで、去年から始めまして、その結果は、昨年大阪大学のときに、それをお話し申し上げました。

こういう双方向教育のコミュニケーションをやってみたらどうなったかということなのでありますけれども、やってみたらやはり非常に受講生は喜んでくれたということ。そして、北海道大学も私見させていただいたのですけれども、もう1つすごいなと思ったのは、北海道大学の先生方も初めは余り躊躇されているというか、何かお忙しいので、躊躇されたと思うのですけれども、返事が来たらもう非常に熱心に一生懸命書いておられるという、あのあたりが実によかったのではないかと思います。

私どもの方、ちょっと申し上げますと、昨年テレビが32.7%の人たちが回答をよこしてくださったのですが、今年は37.7%と5%上がりましたし、それからラジオの方は35.5%だったのが42%というふうに両方とも5%ずつ上がって、特にラジオが多く、去年も多かったのですが、今年42.0%、これは昨年も申し上げたのですけれども、ラジオは主任講師、講師の先生の顔を見えませんが、先ほどスクーリングはいいというお話もありましたけれども、スクーリングもさることながら、講師の先生が書いて受講生と接触すると、そこらのあたりにとても魅力があるのではないかと。今後もこれをやれば、ずっと受講生はさらにふえていこうし、また受講生の学習意欲も盛んになるのではないかと、そんなふうに考えております。

どうもありがとうございました。

○司会（高田）

ありがとうございました。

重ねておわび申し上げますが、今、石田先生からご報告のように受講生も大変多く、また回答率もよろしいということですので、先ほど御覧になったビデオの9月の段階では、ご苦心が多かったようでもありますけれども、新潟は視聴者が少ないという画面の印象はぜひ払拭していただきたいと思います。

それでは、あとの時間も多くはないのでありますが、私がお指名するばかりではシンポジウムになりませんので、ご自由にご発言をいただきたいと思っております。どうぞ、挙手してご

発言をいただきたいと思います。

いかがでしょうか。センターの福井先生、ご感想いかがでございますか。

○放送教育開発センター（福井芳男研究開発部長）

若松先生と同様に、非常に感動いたしたというのが、最初の言葉でございます。双方向の一番問題は、コメントを非常に細かくご返事をお書きになっていらっしゃるようなので、あれの労力というのは、これは放送大学の方では例えば必ずコメントをつけると。60から100件ほど来たらちょっとお手上げの状況に我々すぐ陥ってしまうので、これをどういうふうに、分担でおやりになっているのか、それをちょっとお伺いさせていただければと思います。

○司会（高田）

これは高橋先生と、それから実際、はがきに回答をお書きになった先生、石川先生、それから吉田徹也先生などからお答えいたします。

高橋先生。

○北海道大学（高橋）

双方向のことで非常におほめの言葉をたくさんいただいたのですけれども、これら側としては、今の福井先生おっしゃられたように、率直に言って大変でありました。

まず、来たものを本当は大変だろうという予想が立っておりましたので、我々共同研究委員が、その回答を大半をしようということだったのでありますけれども、特に生体工学の方の回答例は、当初はどうやら感想、こういうものですかという驚きのようなものだったのですが、それが2回、3回といくにつれて、質問になってきたのです。具体的な医学の質問、私は貧血の場合どうなのかと、個別の医療相談みたくなってきたのであります。それに対して、一々講師の方が丁寧に答えていらっしゃる、これは後ほど担当されていた先生からお話あると思うのですけれども、そういうことを私たち委員がはたで見ても、非常にこれはもう、率直に言って続かないだろうというような気がしているのです。この手のことは。だから、双方向そのものはいいのですけれども、来年からは例えばその質問の出し方だとか、できるだけ労力を少なくするというと何となくサービスしないことになるように聞こえますが、そうでなくて、できるだけ双方にとって、時間的にも、それから労力的にも、もう少しスムーズにいくような、そういった形の双方向を考えねばならないかなというようなことが、委員会で話題になりました。だから、すごい大きな問題であります、具体的には、石川先生からお願いいたします。

○司会（高田）

どうぞ、石川先生。

○北海道大学（石川博将工学部教授）

北海道大学工学部の石川でございますが、今回、生体工学ということで、この番組の主任講師ということで、後ほどお話あるかもしれませんが、下澤先生と、もうお一方、3人でつくったわけでございますが、この放送の内容としましては、生体力学という分野と、それから生体材料という、それから生体の情報という、大体3つが柱になっておるのですが、それで放送時間は13回でございます。それでそれが大体3回、先ほど申し上げました3つのテーマで、大体4ないし5というぐらいに分かれております。

それで、質問が参りましたものにつきましては、そのところでの主任講師のところにもまず全部、はがきが参りまして、本部から参るのでございますが、それを今度は、さらに専門的なこととございますが、例えばお医者さんもおられますし、それから研究所でやっておられる方もおられますが、その内容を僕の方で読みまして、それを担当された講師の先生の方に回すわけとございます。そして、その専門的な質問に関しては、その先生にご回答していただきまして、さらにそこにはその場合は必ず記名をしていただくと、どなたが答えたかということを書いておきます。

それから、一般的な感想ですけれども、これに関しましては、僕の方、主任講師の方で責任を持って、いろいろコメントなり、謝辞なりを入れるという形をいたしましたので、先ほどのスライドでは、大体50ぐらいだったと思うのですが、大体もうちょっとあったと思います。60から70ぐらいあったと思いますけれども、それをこなしている感じでは、そんなにすごい、大変ということは、とりまとめているところとございますので、なかったかと思いますが、ある人には非常にたくさんの質問があって、非常に熱心な方は、学会の研究の論文のようなものまで受講生に送るといようなことがございまして、そういうようなことを通しまして、少し受講生との間が近づいていったのでなかったかなと思いますけれども、大体そんなところでございます。

下澤先生、何かございますか。

○北海道大学（下澤楯夫応用電気研究所教授）

石川先生、林先生と生体工学の主任講師を務めさせていただきました北海道大学の応用電気研究所の下澤です。

双方向のアンケートにつきましては、私としましては大変疲れました。受講生の方が、非常に専門的な、極端に言うとお医者さんもおられますし、カウチ・ポテトといいますか、寝そべって見ている方もおられるわけで、いろんなレベルの質問が来まして、私の研究といいますか、私の仕事が、生体工学は生体工学なのですが、比較的基礎的ということもありまして、生体工学という後ろに医療というのがついておりますけれども、自分たちの生活、私の考え方ですが、生活が大学での基礎的な研究とどういふふうに関係があるのかということを知っていただく、あるいは教育とは何であるかということを知って、先ほどのちょっと生意気なようですが、松前先生の話にあったように、全体のレベルアップが全体を幸せにするのだという意味で、少しでもこの放送をきっかけにして興味を持っていただいた方がいたら、それにはまじめに答えなければいけないと思ったものですから、非常に一生懸命書きましたら、私の方の時間が足りなくなりまして、今でもまだ10枚ほど持って歩いております。

そういう意味では、この形を皆さんにやれということではできませんけれども、できるだけやっていただきたいというふうに思っております。

○司会（高田）

ありがとうございました。

ラジオの方、小林先生か吉田先生かお願いします。

○北海道大学（吉田徹也言語文化部助教授）

ラジオを担当いたしました吉田です。

今お二人の主任講師のテレビの方とほとんど同じなのですけれども、質問者の質問用紙に書かれていることは、本当に千差万別でありまして、中に白紙で出したという方も何名かいらっしゃいまして、どういう意味なのかという、伝わっていないのかなと思うのですが、高度な内容を質問する方も、もちろん中にいらっしゃいますし、例えばカフカの比喻は、どういう意味があるのかということさらさら突っ込んで知りたいとか、あるいは日本人にも受け入れがたいような、そういう文学者が、当時のカフカが出現したプラハや、あるいはドイツ語圏で、どのように受け入れられたのかというような、とても狭い枠の中では答えることができないような高度な質問から、それから番組の中で使われた音楽が何であるかといったような質問まで、まさに本当に千差万別でありまして、やはりそれぞれの担当講師の方にはがきを送りまして、回答をしていただきましたけれども、感想を述べられている場合には、こちらが何を回答したらいいかという焦点がほとんど定まらないという、そういう質問の方が実は非常に多くて、その場合には、何も記入せずにほとんど戻ってきますので、主任講師が番組をよく聞いて理解していただいた、これからも聞いてくださいというような趣旨のことをまた書いて、それから番組のポイントはどこにあるかというようなことを、必ずしも質問ではない質問に答えるという形ではなくて書くというような、大体そういう作業が多くて、私たちも、それから中には質問という形ではないのですけれども、番組のあり方、テキストと余りにも密着して、ほとんど同じ内容を放送で繰り返すのは余りよくないとか、あるいは最初の主題であるドイツ文学における「魔」という問題というのが、後半がだんだん薄くなってきたのではないか。あるいはジャンルが全部飛び越えられて、詩もエッセイも書簡なども扱われている。もう少し分けたらどうかというような、そういう具体的なプリティックもありましたので、今後初めての試みなので、それに対する対応というのはすぐにはできないわけですけれども、そういう声も今後の放送の参考になると思って、大変回答には苦勞いたしましたけれども、そのかいがあったような、そういう気持ちであります。

○司会（高田）

ありがとうございました。

福井先生、これでよろしゅうございますか。

私どもの取り組み、概しておほめいただきまして、私は何とも申し上げようがないのでありますけれども、そろそろ締めくくりの時間になっておりますので、最後に2つほど、今後の課題として提起させていただきたいと思うのであります。1つは、この放送講座の根本問題だと思うのでありますけれども、先ほどから話題になっております双方向というのは、郵便を使ってやり取りする形式でございます。近ごろは電子メールというのがはやっている時代なのですが、新潟の先生方もおっしゃるように、このやり方は原始メールである、プリミティブメールであると、まさにそういう印象がございます。

それから、そのほかに放送講座の補助手段は、テキストブックもありますし、スクーリングもありますし、再視聴もありまして、さまざまな地上作戦が可能なのでありますけれども、放送講座というからには、本当の勝負はオンエアだけでやるのではないかという議論も一方にございますですね。その辺の兼ね合い、私どもには何とも把握しかねておるのであります。センターの浜野先生など、日ごろのお考えが、もうお聞かせ願えればありがたいと思っております。

す。いかがでしょうか。

○放送教育開発センター（浜野保樹研究開発部助教授）

放送だけでいいかどうかというのは、放送教育のずっと最初からの問題であります。それは受講生をどう考えるかによると思うのです。本当に大学のエクステンションと考えるならば、やっぱりテキストとか、いろんなものが要るでしょうし、視聴者を中心にした観点に立てば、完結した内容としてテキストは前提にできないとか。ですから、センターでは、私個人では何とも言えないのですが、どちらを重視するかでしか決め得ないものだという気はいたします。ただ、放送で数万とか数十万の方が受講生以外でもごらんになっていますので、その完結した内容のあり方自体は、起承転結全部を含めなくても、例えばイギリスのオープンユニバーシティみたいに、存在し得ることがあると思います。

ただ、そういうやり方についてセンターでは研究しているのですが、そういったものを社会的に知らせる努力をセンターではしてこなかったとか、私もいろんな反省もありますが、やはり受講生をどう認識するかにかかると思います。

○司会（高田）

その点、ほかの方からご発言ございませんでしょうか。

なかなか難しい問題だと思っております。

どうぞ、若松先生。

○放送教育開発センター（若松茂研究開発部教授）

今、浜野先生からご発言がありましたけれども、1つ補足いたしますと、私たちのセンターのプロジェクトの1つとしまして、いわゆるテレビ会議システムを使う、遠隔スクーリングという実験を数年来、電話会議と静止画というレベルから、現在の通信衛星のレベルまで、数段階のメディアの利用による遠隔スクーリングという実験をやっております。ごく最近も、先ほど所長からも紹介ありましたような、大阪でも学術的なミーティングと、それからクラスルームの遠隔授業というのを高専の学生さんを対象に最近やりましたけれども、そういうことが、実際の先生方が、各地のスクーリング会場に向くのに代替できるかどうかというのが、最大の課題になっております。これはいろいろ現在検討中のございまして、最近は、技術的にも相当コスト・エフェクティブなシステムも開発されてきておりますので、そういうものを取り入れてみるという実験は、今後とも続けていきたいと考えております。

○司会（高田）

ありがとうございました。

新しいメディアのご研究も大変価値あることだと思います。

同時にまた、組織づくりをしていくというような面も、将来一層重要になっていくと思いますが、その辺松前先生、もう一言お願いできますでしょうか。

○東海大学長（松前）

組織づくりといいますか、こういう放送教育をどうやって普及させていくかということになるわけですが、これは私、結論から申し上げますと、やはりボランティアな小さな活動の蓄積ではないかと、私は思っております。

というのは、テレビを普及させたのも、最初は街頭でテレビを見せて、そしてテレビという

もののおもしろさ、また興味というものを一般大衆の中から引き出していったということで、今日のテレビが存在すると思っております。ですから、例をとりますと、雪なら雪もやはり核がなければ雪は結晶しないと、また真珠も核を入れてやらなければ真珠が育たないと。つまりそういう動機づけをどこでやるかというのは非常に重要だと思っております。それをマスメディアで育てていくということが、やはり放送教育の最もいい、1つの構造ではないかと私は思っております。

ですから、我々もやってきたときには、結局、最初は辻説法だと思っております。日蓮ではございませんけれども、先ほどの夕張の塾もあれも辻説法の1つで、あそこに学習センターからお世話いただいたテレビの番組を持って行って見せて、こういうのを見て、こういうふうに見るとこういうふうなおもしろさがあるのだということを知らせていくということが、地道な活動が必要ではないかと私は思っております。

○司会（高田）

ありがとうございました。

今のご発言に対しては、北海道地区の教育委員会のご担当の方、あるいは受講の方のご感想ももう一遍お聞きしたい気はしますが、時間がございませんので、それは省略いたします。

それで、やはり受講生拡大、あるいは受講生サービスというのが、私どもの主たる課題でございますので、特に受講生のサービスという点をもう一度ご検討願って、終わりにしたいと思っております。

先ほど私どもの下澤教授が発言された中に、カウチ・ポテトというのがありまして、この言葉は北大の私どもの仲間で、ことし大分議論になりました。実は私はその言葉を受講案内に書きましたのです。カウチ・ポテト族でもよろしいからどうぞ、気軽に受講してくれということを書きました。それに対しては、事務部門でもいろんな反応があったりして、私は間違いではないと思っておるのでありますけれども、きのう新潟の方々共同研究でも、その話題を出しましたところが、それも一面はあるけれども、もう一つ重要なご注意をいただきました。

カウチ・ポテトで、要するに長いすに寝そべって、ポテトをかじりながら、気軽に聞いている人も大事だけれども、もう一つあるとおっしゃいましたのは、働きながら聞いている人ということに注意なさいということで、まことにごもっともであると思いました。働きながら受講する方、さきほど渡辺さんのご発言にもあったように、視聴している間に電話がかかってくれば、それに応答しなければならない、そういう状況下で視聴していらっしゃる方のことも考えなければいけない。非常に貴重な教訓であったと思います。

そのようなことも含めまして、受講生のサービスというのは、本質はどこにあるのか、仲間て恐縮ですが、高橋先生もう一言まとめてくださいますでしょうか。

○北海道大学（高橋）

私たちの共同研究のテーマであります受講生拡大と受講生サービスでありますけれども、その受講生サービスということについて、実は一体何がサービスなのかということなのですが、いろいろな考え方があると思うのです。それをちょっと考えてみますと、受講生から来る要望があるわけです。それにこたえるのもサービスであろうと思うのです。

私たちのいろんな受講生の要望をピックアップしてみますと、例えば時間帯を変えてほしい

とか、テレビは深夜はとでもつらい。いい時間にやってくれと。ラジオの場合は日曜の9時からなのですが、これが余りにもゴールデンタイムすぎて、映画が見れないとか、いい番組が逆に言えばおもしろい番組を見てしまって、ラジオが聞けなくなったと。かえっていい時間であるが故に、もうちょっと時間を変えてくれとか、いろんな要望があるわけです。

あるいは講義内容も、先ほどだれかがお話ししておりましたテキストと同じことを言ってもだめではないかとか、もっと図版を入れよとか、もっと音楽を入れてやってくれとか、あるいはテーマも地方性に、北海道ということに絞ってやってくれと、さまざまなことがあるわけです。そういうのは、しかしながら一々全部、つまりこちらを立てれば、あちらが立たずということになって、極端に言えばとても応じ切れないのであります。

そういうことを一応かたわらに置きますと、私たちが送り手からのサービスは一体何かということになって、それがやはり例えば双方向であるし、例えばスクーリングであるというふうに私は考えるのです。

ともにこれは、どちらも先ほどから話題になっております、いわば講師と受講生との言ってみれば肌と肌との触れ合いのような、そういう場が双方向でもつくれる。つまり講師からの生声ではないけれども、その筆でもって、その講師の人柄みたいなものと何か触れているという感じがするのだと思います。

それからスクーリングは、先ほどからお話するように、本当に講師と受講生との間の人間と人間との関係、テレビやラジオの電波ではちょっと距離があった。それが生身に触れたというところが、一番ポイントではないかと思うわけです。

そういたしますと、僕個人の考えでは、この双方向とスクーリング、何かどうにかしてやっぱりこれを継続して、あるいはそれを発展して、もっともっと質的によいものにしていくと、そういうことが一番今の段階ではいいのではないかと思うわけです。

もう1つ、そのサービスについてなのですが、これは1つのデータとしてお話しいたしますけれども、先ほどお話ししたときに、意見調査ということをちょっと申しました。その意見調査の今年の第1番目の意見調査は、一体受講生サービスを受講生の方々はどのようにとらえているかということを知ったのであります。つまりこれはサービスといっても、サービスイコール必ずしもありがたいわけなので、そこでこちらのねらいは、双方向の場合もそうですけれども、何かをせよというサービスですね、それが受講生に果たして本当の意味のサービスになるのかどうかと、そういうことを問うてみたわけです。

時間がありませんので簡単に申しますと、その結果、地方も札幌も、ともに余り強制されるのは嫌であると。特に、札幌はそれが強かったのでありますが、カウチ・ポテトとは言わないけれども、もう少し肩ひじ張らないで、そして聞きたいというような声が結構あったのです。地方の方も、強制的なものよりは今程度でいいということが一番多かった。今程度というのはどの程度かということは問題ですけれども、少なくとも何かを強要されとか、強制されるというのは、余りサービスとしては好まれていないというような、そういう調査、アンケートというか、意見調査の結果が出たのです。

そういたしますと、僕個人の考えは、結局は、先ほど高田委員長がおっしゃっていたけれども、そうなると双方向にせよ、スクーリングにせよ、ともにそれは言ってみれば内容にかかわ

ることだと思ふのです。形というよりは、内容にかかわることである。そうすれば、放送講座というのは、やはりその原点は内容にあるのかなと、その内容をいかにするかということなのですけれども、しかしやはり、あれやこれやといろんなことを考えるよりも、最初にまずその原点として内容を、つまり地方に行けば大学の講座が聞ける、知的な講座が聞けるというふうに期待をして来られている。それならばそれにこたえるようなやはり内容も持っていかなければならないのではないかなと。結局はその原点に戻るといふところなのであります。

以上です。

○司会（高田）

ありがとうございました。

シンポジウムの終わりに原点に戻ったわけではありますが、今までのご発言に対して、たくさんの方の発言の希望の方がいらっしゃると思うのであります。お二人ぐらいに伺ってみたい気がいたしますが、いかがでしょうか。さまざまなご発言をいただいておりますが。

他の地区からのご発言、余りいただいておりますので、もう少し時間をちょうだいしてと思いますが、いかがでしょうか。

特にございませんでしょうか。

それでは、時間は10分ほど経過し過ぎておりますので、まとめに入らせていただきます。

私ども市町村の方々のご提携をいただきながら、主眼はやはり、何度も申しましたように、受講生拡大と受講生へのサービスの、この二つでございます。それで、今後とも道内の各市町村には誠にご苦勞でありますけれども、ご協力をお願いしたいわけでありまして、また放送教育開発センターの方のご指導もいただきたい。放送局にも各段のご努力を願いたいと、そういうお願いばかりが頭にひっかかってしまうわけでありまして、もう少し問題を整理いたしますと、受講生拡大のためには、カウチ・ポテト族も大歓迎という姿勢を持っていてよろしいのではないかと私は思います。もちろん、先ほど申しました働く人という観点も加えた意味でございますけれども、とにかく、とっつきやすいような形で放送講座をより拡大していくという面を、今後とも持続的に努力していきたいと思っております。

ただ、それだけではいかにも迎合的になって、いわゆるお金もうけのカルチャーセンターに墜落する危険がございます。そこを締めくくるのは何かといえば、今、高橋さんがおっしゃったような内容の勝負であると、これ、まことに平凡な結論でありますけれども、その辺に帰着するかと思っております。

何度も話題になりましたように、昨年からの調査の結果では、視聴者の大部分は、受講生の大部分は、生涯学習のためにこれを受けていると。そして、最大のポイントは、学問に触れる喜びであるということになっております。これは昨年の結果、疑う余地のないポイントであると思っております。その辺をさらに深く、私ども受けとめまして、将来の展開を願っていきたく思いますが、第1セッションの主題から申せば、市町村の方々に対しては、センターの方からより一層のご支援もいただきたいとお願いするばかりでございます。北海道地区の中で処理できることは、極めて少ないと思わざるを得ません。かといって、ボランティアに各地区の方々に頑張ってくださいと申し上げ続けるだけでは、進歩がないという気がいたします。より一層即物的なご配慮を将来いただければ、この構想が一層実っていくであろうかと思っております。

ます。

まことにプアな結論でありますけれども、これをもって第1セッションのまとめとさせていただきます。

大変長い時間、しかも15分ほど延長いたしました。北海道の努力に対して、高い評価もしていただきまして、私ども一同、感激しております。今後ともよろしく願いたします。

では、ここで第1セッションを終わりといたします。

—— 拍手 ——

○総合司会

皆様、お疲れさまでございました。

これで第1セッション終了とさせていただきます。

この後、5時30分からは、隣の会場で懇談会を開かせていただきます。この後、5時30分から隣の会場で懇談会を開かせていただきます。どうぞお集まりいただきたいと思ひます。

なお、明日は、朝9時受付、9時30分の開会でございます。

また、明日も引き続きご出席の皆様方、資料はどうぞそのまま机の上に置いてくださって結構でございます。会場はロックされることになっておりますが、貴重品などどうぞお持ちいただいて、ご退席願ひます。

皆様きょうはお疲れさまでした。ありがとうございました。